

「地球の未来との向き合い方」

富山県立高岡南高等学校二年 高野 真未

「未来を担う」とは何だろうか。大人たちは私たちに期待を込めて「あなたたち若者が未来を担うのだ」と言う。「担う」というのは責任を負うということだ。本当に今必要なのは、「未来を担う」となるだろうか。

私は普段、学校の生徒会に所属し、学校の行事の運営などに携わっている。生徒会役員

が意見を出し合い、企画して可能かどうかを確認し、要項などを作り、全校生徒に知らせる。学校ひとつを動かすのにもいくつもの過程があり長い時間がかかる。たゞ一日の行事を行う未来のために、多くの人の協力を必要とする。しかし私たちに期待されているのは県や国や世界の未来を担うことだ。学校での大変さを知っている私にはこれは責任が重すぎると思う。私は「担う」とより「共に創る」との方が大事だと思う。

今年、私は高校生とやま県議会と
に参加した。これは、富山県内の各高校代表
の二年生が集まり、テーマ別の委員会に分か
れ、富山をよりよくするため提案を行う。
そのために、県知事や県議会議員との意見交
換会なども行われた。まだ選挙権もなく政治
参加できない私にとって実際に県を動かして
いる方たちとの交流は貴重な体験だった。そ
して私たちのような高校生の考えを必要とし
ていることを知ることができた。私はこの体

験を通して誰が責任を負うのかではなく、す
べての人が協力して「未来を創る」ことが重
要なのだと思った。
そして、未来を創るには国境も関係ないの
だと感じる出来事があった。それは、一年延
期されていた東京オリンピックの開催だ。開
催までオリンピックへの賛否が世界中にあふ
れていた。いざ開催され、終わってみると不
思議と「ヤッてよかっただな」と思う人が多く
いる。これは、選手たちの並みならぬ努力や

雄姿が見る者の心を動かしたからだ。自国の
選手に限らず称えあう姿に感動を覚えたから
だとも思う。まさに、国境を越えて未来を創
りあげた例であると思う。
かつては責任者が絶対で、働ける若者たち
がその場所の発展に尽くした。現代でも責任
者の下で働き、何か問題を起せば責任者が
責任をとる。このような上下関係の構造がど
こに行ってもある。責任者は大事だ。指示す
る人がいることでうまく集団が動く。これは
必要なことである。しかし、今は多様性が重
視される世の中だ。あらゆる格差をなくし個
性を尊重することを目指している。責任者がい
る中でも様々な人が意見を出し合い、よりよ
くしていこうと思わなければ発展していくな
どが困難な時代となった。だから、「未来を
担う」というよりも「共に未来を創る」と
の方が大事だと思う。世代や性別、国境を越
えて協力し、よりよく新しい地球をすべて
人で創りあげなければならぬと思う。若者

に未来を担ってもらうのではなく、大人たちに責任をとってもらうのではなく、長い時間と多くの仲間たちと必要な未来を創っていくべきなのだと思う。私も生徒会をしていくなかで仲間や先生たちがいなければ前に進むことができない。それは、世界にも同じことが言えると思う。だから、私は「未来を担う」という若者に向けられる言葉に代わって「共に未来を創る」という協力的な言葉になってほしいと思っっている。こんな些細な変化が地球の新たな一歩なのではないだろうか。